

此の天守臺は、本丸と東丸との堺なる臺上において、今に至り天守臺と呼べり。此の天守創立の年曆、三州志等にも記載せずして、未だ詳かならず。按ずるに、文祿二年に利常卿金澤城天守下の局にて誕生し給ふと三壺記等に載せられたれば、天正の末か、若しくは文祿元年本丸の高石垣築造の頃などに創立せられたるならんか。寛永十八年幕府へ進達ありし系圖傳に、慶長七年十月晦日夜亥時。雷震。加州金澤城天守回祿時。所藏之家譜寶器等悉焼失。と載せ、村井長明の象賢紀略に、慶長五年大聖寺攻の又翌年十月晦日御城天守へかみなりおち申。と見ゆ、聞見雜錄にも、金澤城天守に雷落つる事、關原陣の三年目十月晦日夜。とあり。菅家見聞集に、古老曰く、天守創立の時、加州黒津船浦の神木を伐りて虹梁に用ひられし故にや、黒津船浦の方より雷鳴して天守炎上すと云ひ傳ふ。とあり。雷火の爲炎上せし事は下文に載す。三州志來因概覽附錄追考に云ふ。公方家の城にては天守と書き、國主の居城にては殿主と書くとの説あれども詳かならず。天守は天正四年信長公江州安土山に築くを始めとすと云ふと。關屋政春の古兵談には、明智

光秀江州志賀郡拜領の時、坂本の城に作りしより始る。と云へり。平次按ずるに、天守・殿主の説は、後世軍法者流の附會妄誕なるべし。天守の濫觴は、温故遺文に載せたる武家諸事起原覺書に、殿守の起りは、永祿元年春の事なるに、尾州樂田の城を敵不意に攻め入りし事あり。于時城主の父家督の後、殿守と名をかへて、城中に高さ二間餘に壇を築き、其上に五間・七間の矢倉を作り、眞中に八疊敷の二階座敷をこしらへ、八幡大菩薩・愛宕山權現を勧請し奉り、常に信仰有りしなり。弓・矢・楯等をも縁通りに多く掛置きしが、即ち此所を能く持ち固め、是にて敵を追ひ出し候ひき。如此有りし事を、他國に至りて聞き及びしは、今度尾張國樂田の城運を開きつる事はかやうなり。殿守有りしが、其れにて大敵を追ひ出しつる。是は誰もほしき事也とて、殿守の圖を寫しよせ、高き壇を築上げ、いかにもそそうに殿守を立てしと也。今世如此甚だ大きに成りし事は、江州安土の殿守よりか。是其の濫觴なり。とあり。天守の起原は是にて委しく知られたり。

○三階櫓

此の櫓は天守臺に建築ありたりと云ふ。寶曆五年幕府國目附來着尋問の答書に、本丸三階櫓壹ヶ所、上の重貳間四方、中の重三間四方、下の重五間四方。とあり。年譜に、寶曆五年五月六日江戸よりの國目付松平頼母・大河内善兵衛城中巡見有之、本丸三階櫓に而饗應、菓子茶出之。と見ゆ、同九年四月十日金澤大火城中延焼の時、三階櫓も焼亡し、其の後再造の擧なくして廢藩と成りたり。右三階櫓は三壺記に、慶長十年十一月晦日金澤城天守に雷落ち、本丸御新宅まで悉く焼失す。其の時より天守を除き、三階矢倉に成りたり。と見ゆ、變異記にも、慶長十巳年十一月晦日、金澤御城雷火にて焼け、翌年御造營有り。天守焼失に付、此時被止之、三櫓と成る。とあり。三州志來因概覽附錄には、慶長七年壬寅十一月晦日、金城雷火のために焼却し、天守灰す。今猶此の天守の遺址と云ふ所あり。明年癸卯春再造落成。此の時天守は再造なく、三層敵樓を造らせらる。と載せたり。自註に、青地禮幹撰系譜に據りて七年壬寅十一月晦日とす。といへり。平次按ずるに、七年十月晦日也と象賢紀略等にあり。禮幹の説も非也。また金城深秘錄に云

ふ。三階櫓は、往昔天守の建方に候處、慶長年中雷火の爲に炎上、其の後三階の建方に被命由。雖然地割の所にては、天守の心持歟、高欄を付けられ廻られるやうに相成居。寶曆九年火災以前は右の通りにて、上の重は疊敷、上壇も有之よし。天守の唐紙障子は、挽手付けざる事古實のよし傳承す。但し寶曆五年に幕府の目附衆へ書出にも、天守無御座と書出有之と。平次按ずるに、櫓は矢庫の義なり。日本紀に起庫儲箭とも、又起造兵庫收聚國郡刀甲弓矢ともありて、兵庫をヤグラと訓めり。もと矢を納め置ける庫藏なる故也。能登國羽咋郡に矢藏谷村といふあり。近邑に火打谷村といふもあり。矢藏谷は往古兵庫ありし遺名なるべし。さて今いふ櫓は、陸奥話記に、向厨川柵云々。柵上構樓櫓。鋭卒居之。遠者發弩射之。近者投石打之。とあり。是即ち矢倉にて、柵は城郭也。また後三年記にも、家衡が乳母子千任といふもの、矢倉の上に立つて、聲をはなちて將軍にいふやう云々。又千任丸を召出して、先日矢倉の上にていひし事、唯今申してんやといふ云々。など見わたれば、されば頼義・義家の時代より既に後世の造り方の如く